

資 料

「1930年代の筑豊地方における主要石炭輸送駅の分布と現況」

宮 下 弘 美

はじめに

北海道と九州地方を中心に生産される石炭は、工業化が進展する以前には外国汽船の燃料炭や輸出品として、その後は日本の経済発展に欠かせない重要商品として、また主要財閥にとってはドル箱の役割を果たしてきた。戦後になると、鉄鋼業界からの根強い石油へのエネルギー変換の要望もあり、結果的に閉山が進んでいくことになった。その場合に課題となったのが、日本の石炭価格が他のエネルギー価格に比べて「高炭価」であるということであった。日本の石炭業は、戦時中や戦後復興期の政府の低炭価政策の要であったことから合理化への機会をもてないままであったが、石炭生産費はもとより生産地から消費地までの輸送経路の長さや銘柄制度にともなう輸送コストもまた石炭業の合理化の隘路になっていたことが考えられる。

石炭産業が消失してしまった九州において、石炭業の流過程を明らかにすることは困難な作業であるが、本稿では、1935年の筑豊地方の主要石炭輸送駅の動向をとらえてみたい。また、それらの駅の現状についても言及してみたい。

1 九州炭の概要

九州地方のおもな炭田は、福岡県（筑豊、糟屋、朝倉、三池）、佐賀県（唐津）、長崎県（北松浦、西彼杵）、熊本県（三池、天草）に分布しているが、最大のものは筑豊炭田である。遠賀川の流域に広がる筑豊炭田では、石炭は坑所から直接消費地又は積出港に搬出されるが、戸畑駅や若松港にむけて輸送される割合が高い。

1933（昭和8）年の石炭産出高合計は3,252万トンであり、そのうち九州炭は2,085万トン、北海道炭は707万トン、それぞれ64%、21%をしめていた（出所は「表1」に同じ）。

表1 筑豊の主要炭鉱と送炭駅一覧(駅名は「図3」「図4」に対応)

(t、人)

番号	駅名	開業年	積込場	炭鉱名	鉱業権者	代表者	開坑年	出炭量	稼働者
1	中間	1891	中間駅専用線	中鶴第二坑	大正鉱業(株)	伊藤伝右衛門	1919	132,364	948
*2	中鶴(貨)	1923	中鶴駅	中鶴第一坑	同上	同上	1906	462,862	2,706
3	新手(貨)	1912	新手駅	新手炭鉱	小林勇平	小林俊治	1930	130,103	878
*4	香月	1908	香月駅	大辻炭鉱	貝島炭鉱(株)	草場義夫	1904	389,004	1,366
5	野面(社)	1915	野面駅	木屋瀬炭鉱	九州鉱業(株)	相羽虎雄	1888	136,522	993
*6	筑前中山(貨)	1933	筑前中山貨物課	新入炭鉱	三菱鉱業(株)	横尾帝力	1915	428,508	1,185
*7	新菅牟田(貨)	1915	新菅牟田貨物課	大之浦炭鉱第三坑	貝島炭鉱(株)	草場義夫	1911	393,871	1,296
8	菅牟田(貨)	1904	菅牟田貨物課	同上 第五、八坑	同上	同上	五坑1905 八坑1928	352,614	1,140
9	桐野	1902	桐野駅	同上 第二坑	同上	同上	1885	276,904	1,227
10	同上		桐野駅分岐専用鉄道積場	同上 第六坑	同上	同上	1914	316,283	1,434
11	新多(貨)	1913	新多貨物課	古河第二日尾炭鉱	古河石炭鉱業(株)	長谷川恭平	1911	291,435	1,306
12	高雄(貨)	1909	高雄駅	高雄鉱第一坑	日本製鉄(株)	吉田健三郎	1880	122,000	633
13	伊岐須(貨)	1899	伊岐須駅	同上 第二坑	同上	同上	1892	309,000	1,509
14	枝国(貨)	1909	枝国貨物課	中央炭鉱	同上	同上	1906	189,476	1,433
15	同上		枝国駅分岐小正専用線	潤野炭鉱	同上	同上	1895	285,238	1,258
*16	鯉田炭坑(貨)	1909	鯉田炭坑貨物課	鯉田炭鉱	三菱鉱業(株)	横尾帝力	1880	730,800	2,179
17	新飯塚	1902	芳雄駅	山内炭鉱	(株)麻生商店	野田勢次郎	1891	168,000	660
18	上三緒	同上	上三緒駅	網分炭鉱	同上	同上	1906	218,000	1,075
19	赤坂炭坑(社、貨)	1926	赤坂炭坑貨物課	赤坂炭鉱	同上	同上	1913	277,200	1,415
20	鴨生	1913	鴨生駅	三井山野第二、三坑	三井鉱山(株)	山川良一	1907	292,602	1,638
21	漆生	同上		同上 第一坑	同上	同上	同上	272,156	1,016
22	稲築(貨)	1923	稲築貨物課	稲築炭鉱	日本製鉄(株)	吉田健三郎	1919	160,500	722
*23	忠隈(貨)	1898	忠隈駅	忠隈炭鉱	住友炭鉱(株)	向野義夫	不詳	413,471	1,871
24	豆田(貨)	1909	豆田線	豆田炭鉱	(株)麻生商会	野田勢次郎	1901	184,400	1,112
25	上穂波	1928	上穂波駅分岐専用線	嘉穂炭鉱	嘉穂鉱業(株)	松村茂	1927	267,238	813
*26	平恒(貨)	1917	平恒駅	飯塚炭鉱	飯塚鉱業(株)	横尾帝力	1913	557,200	1,534
27	白井	1895	白井駅	吉隈炭鉱	(株)麻生商店	野田勢次郎	1912	216,600	1,760
28	同上		白井駅分岐専用線	平山炭鉱第一鉱	平山鉱業(株)	大西 辰	1931	167,610	899
29	大隈	1898	大隈駅	漆生炭鉱	久恒鉱業(株)	久恒貞雄	1917	112,233	694
30	下山田	同上	下山田駅	古河下山田炭鉱	古河石炭鉱業(株)	長谷川恭平	1897	304,421	1,113
31	同上		同上	山田炭鉱	山田炭鉱(株)	興侶友兼	1925	146,990	968
32	上山田	同上	上山田駅分岐専用鉄道猪鼻	上山田炭鉱	三菱鉱業(株)	横尾帝力	1898	317,814	948
*33	赤池(貨)	1904	赤池駅	赤池炭鉱	明治鉱業(株)	林 秀観	1889	414,698	1,641
34	方城(貨)	1903	方城駅	方城炭鉱	三菱鉱業(株)	横尾帝力	1902	314,567	1,183
*35	豊国(貨)	1897	豊国駅	豊国炭鉱	明治鉱業(株)	板橋喜介	1891	496,234	1,812
36	大藪(貨)	同上	大藪駅	三井田川第二炭鉱	三井鉱山(株)	林 新作	1900	215,167	639
*37	伊田	1895	伊田駅	三井田川炭鉱第三坑	同上	同上	1905	479,176	1,534
38	同上		同上	同上 斜坑	同上	同上	1900	175,972	524
39	後藤寺	1896	後藤寺駅	同上 第一坑	同上	同上	不詳	233,110	573
40	第一大任(貨)	1899	第一大任駅	大峰二坑	蔵内鉱業(株)	野北泰成	1899	229,094	739
41	庄(貨)	1904	庄駅	峰地第一鉱	同上	同上	1902	199,436	752
*42	折尾	1891	日炭専用鉄道高松積場	高松炭鉱	日本炭鉱(株)	島本徳三郎	1925	396,917	1,853
43	同上		同上 梅ノ木積場	梅ノ木炭鉱	同上	同上	1920	112,655	598
44	新延	1908	新延駅	木戸第一坑	木戸炭鉱(株)	渡邊代蔵	1902	113,331	1,140
45	同上		同上	藤井炭鉱	藤井鉱業(株)	藤井○三次	1909	125,385	833

資料) 門司鉄道局運輸課『沿線炭鉱要覧』1935年、『停車場変遷大辞典 国鉄、JR編』JTBパブリッシング、1998年。

註) ①出炭高は1934年の数値。②稼働者の内訳は、採炭夫、支柱夫、運搬夫、選炭夫、機械夫、工作夫、雑夫。

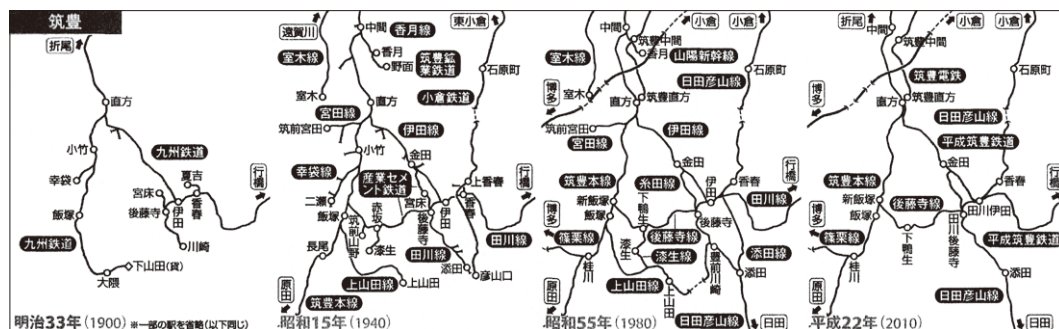
2 筑豊地方の鉄道路線図と石炭輸送

「図1」は、1900(明治33)年、1940(昭和15)年、1980(昭和55)年、2010(平成22)年の4つの時期における筑豊地方の路線図の変遷である。直方^{のうがた}で南側からの鉄路が集約されて、折尾、若松、戸畑方面へと線区は続いている。南側には、飯塚、金田、後藤寺、伊田、添田などの駅が現在も残されている。2020年の路線図から、現在のJR九州の線区として、筑豊本線(路線図には出ていないが若松～折尾間のほか、折尾^{けいせん}～桂川、桂川～原田間の3区間)、後藤寺線(新飯塚～田川後藤寺間)、篠栗線(吉塚～桂川間)、日田彦山線(城野～夜明線)の3線区が存在している。ただし、日田彦山線のうち、添田駅～夜明・日田駅間は2023年8月からBRT(バス高速輸送システム)が運用されている。

伊田線(直方^{いた}～田川伊田間16.2km)、田川線(田川伊田～行橋間26.3km)、糸田線(田川後藤寺～金田間6.9km)は、第3セクターの平成筑豊鉄道として運行されている。添田線(香春^{かわら}～添田間12.1km)、香月線(中間^{かつき}～香月間3.5km)、上山田線(豊前川崎^{かみやまだ}～飯塚間25.9km)、宮田線(勝野^{ふぜん}～筑前宮田間5.3km)、漆生線(下山田^{うろしお}～下鴨生間7.9km)、幸袋線(二瀬^{しもかも}～小竹間7.6km)は廃線になっている(『週刊歴史でめぐる鉄道全路線国鉄・JR筑豊本線』2009年)。「図2」も参照のこと。

「表1」が1934年の筑豊地方の石炭産出高が40万トン以上の炭鉱45か所、および上位11炭鉱に*印をつけた一覧表である。出炭高の多い優良炭鉱には、三井鉱山(株)、三菱鉱業(株)、住友炭鉱(株)をはじめとする3大財閥の炭鉱のほか、大手が連なっている。これらの炭鉱以外にも中小の炭鉱の実態を知ることができるが、本稿ではおおよその傾向を知るために今回は省いた。この表に示されている炭鉱の石炭がどの駅に集約されているのかを示したのが「図3」「図4」である。「表1」の駅名には便宜上ナンバリングしているため、上位11炭鉱が石炭を集約する駅にも同じ番号をつけておいた。

図1 筑豊の線区の変遷



出所)『日本鉄道旅行歴史地図帳 九州 沖縄』新潮社、2011年、14頁。

図3 筑豊の線区(1935年)(資料は表1に同じ。筆者が加筆)

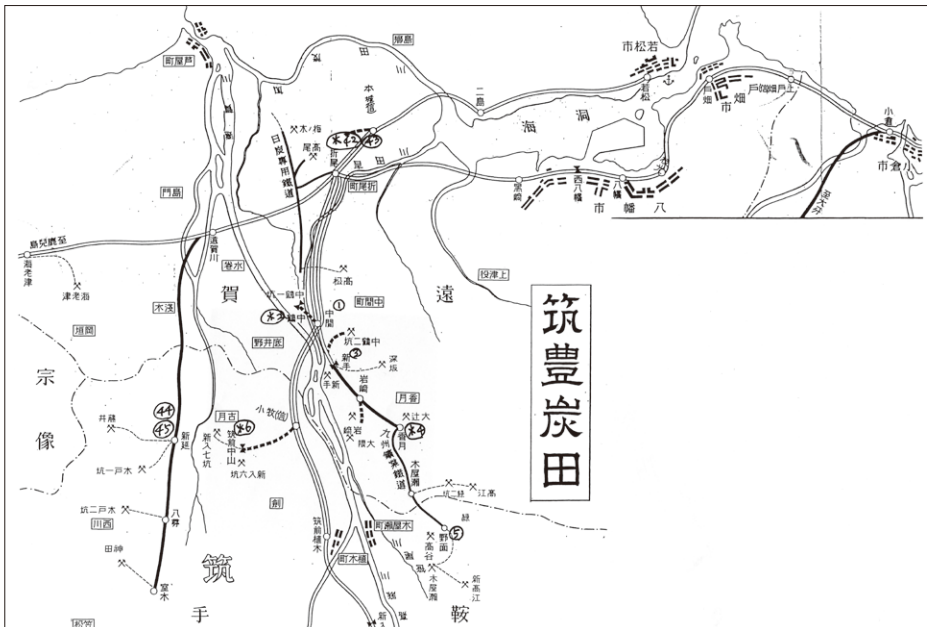


図4

